



ベナン南部ズー県ザニヤナド市にあるグベモンタン病院の待合室。ここで、ブルーリ潰瘍治療の権威、シスター・フリア・アギアル医師が日々治療に尽力している。2015年7月15日。写真はすべて、ベナン。

ベナン 顧みられない熱帯病

世界でもっとも知られていない熱帯病のひとつ「ブルーリ潰瘍」。

感染すると、足や腕の皮膚に潰瘍ができ、治療を受けないと患部が壊死することもある。

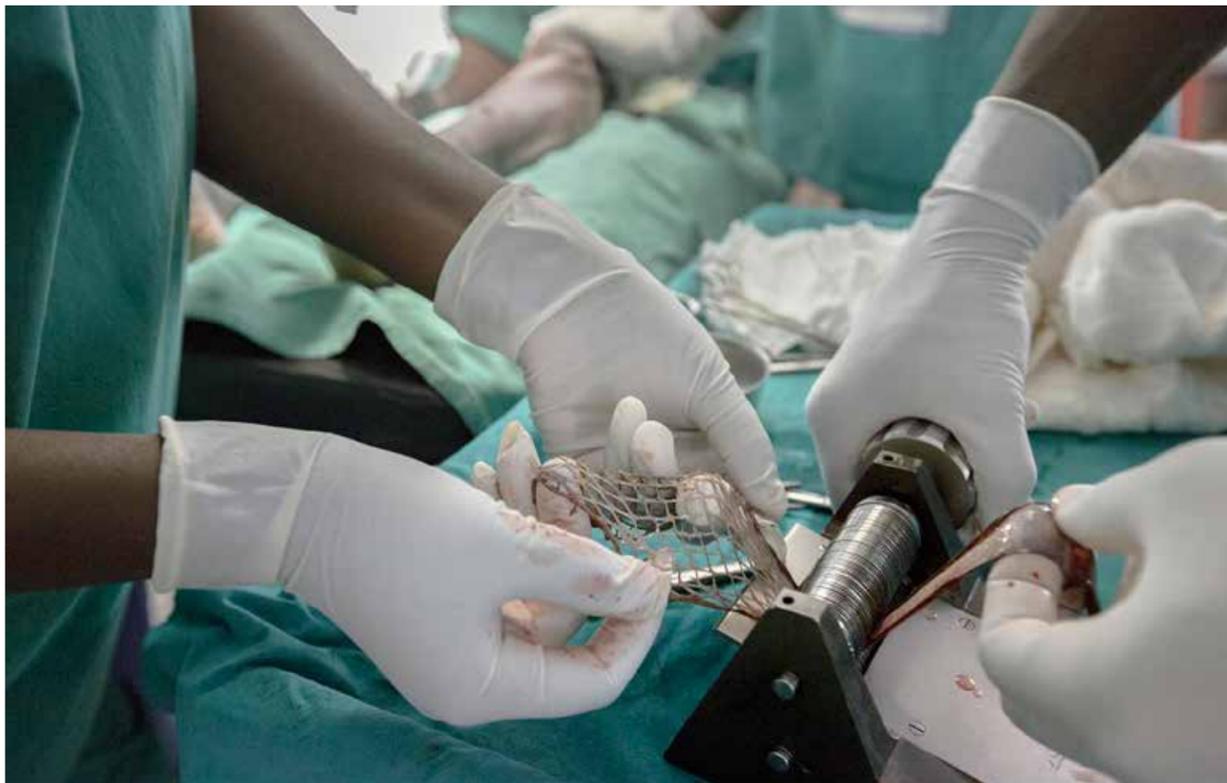
しかし、初期段階で治療すると完治することが多いため、早期発見のため、この病気の周知に尽力する人々がいる。

写真・文／アナ・パラシオス

Photo & Text by Ana PALACIOS



ダボゴン・サン・カミーユ病院で、ブルーリ潰瘍に効く抗生物質のリファンピシシとクラリスロマイシシを受け取る患者の少女。ズー県アグバニズーン地区ダボゴン。2015年7月15日



グベモンタン病院で皮膚の移植手術を受ける患者。カットされた健康な皮膚を、ストレッチ機でメッシュ状にして、病変部分を覆う。ズー県ザーニャナド市。2015年7月21日



農村部での啓蒙活動。症状が出たらすぐに気づくよう、周辺住民を集めて病変した皮膚の写真を見せている。アトランティック県セジェ・デヌー村。2015年7月8日

ブルーリ潰瘍 撲滅を目指し奮闘

WHO（世界保健機構）によれば、世界には「エイズ」「結核」「マラリア」の三大感染症と並んで、「顧みられない熱帯病（NTDs=Neglected Tropical Diseases）」と呼ばれるものがある。「顧みられない熱帯病」には毎年10億人が罹患し、「ハンセン病」「デング熱」「狂犬病」という聞き覚えがあるものや、「ブルーリ潰瘍」という聞き覚えがないものまで17種類ある。ここではブルーリ潰瘍を紹介しよう。

ブルーリ潰瘍は1960年代にウガンダのブルーリ地方で、大きな潰瘍にかかった患者が多発したことから名づけられた。80年代からは世界各地で類似した症例が相次いで報告され、2004年になるとWHOも警告を発するほど爆発的に増えた。しかしその後も増え続け、アフリカ各国、オーストラリア、中国、日本（注）、西太平洋、メキシコなどに蔓延した。

2013年にWHOが再度警告を発し、薬剤治療やリハビリテーションや医療体制が整備されると、だいぶ下火になった。現在ではベナン、ガーナ、コートジボワールの西アフリカ諸国で年間5千人前後が罹患している。死亡者も出ているが、救の推定は難しい。病原体はマイコバクテリウム・ウル

セランスという細菌で、水中昆虫や蚊、クモやムカデによって媒介される模様。だが感染経路は不明で、ワクチンは研究段階だ。患者は川辺や湿地帯の住民、とくに15歳以下の子どもに多く、彼らが患者の半数以上を占める。症状は、最初は皮下に白い小さな塊ができ、周囲の皮膚が黒ずんでくる。手足、とくに下肢、足の甲や踵に頻発。まれに顔面などにも出現。痛みがないので放っておくと、皮膚や軟組織が破壊されて潰瘍となる。骨まで影響がおよぶと、その部分が壊死して機能障害を残すこともある。重症者には皮膚の移植や、手足の切断手術がされる。

現在、ベナンではブルーリ潰瘍の治療のために、多くの人が努力を続けている。ズー県のグベモンタン病院では、スペイン人シスターのフリーア・アギアル医師が25年以上にわたり専門医として働き、週平均で50件ほどのブルーリ潰瘍の手術を執刀している。この病院は地域の大きな治療拠点となっている。地元の行政も協働しており、早期発見できれば80パーセントは完治できるし、抗生物質の投与だけで大きな効果があるという。またNGOが村々を回って病気の啓蒙活動をおこなっている。早期発見に一役かっている。WHOは2030年までに「顧みられない熱帯病」の撲滅を目指している。ベナンの人々の熱い闘いが、実を結ぶよう祈りたい。

（構成・翻訳／野口みどり）

（注）日本でも1980年から2014年までに53例が報告された。



グベモンタン病院に入院している子どもたち。ロコソウ(左)は7か月入院している。腕の皮膚がメッシュ状になっているのは皮膚移植手術を受けた痕だ。ズー県ザーニャナド市。2015年7月19日

アナ・バラシオス
スペイン・サラゴサ生まれ。マドリド在住。ジャーナリスト・写真家。映画業界で働きつつ、おもにアジア、アフリカ地域でドキュメンタリー写真を取り始める。『エル・バイス』紙などに寄稿。